第１回　府立高校の在り方ビジョン（仮称）検討会議　（概要）

１　日　　時

令和３年５月７日（金）午後３時～同５時

２　場　　所

京都産業大学むすびわざ館　３－Ａ（３階）

３　出 席 者

○委　　員　10 名（欠席なし）

○教育委員会　橋本教育長、木上教育次長、山本教育監、大路管理部長、吉村指導部長、相馬高校改革推進室長、石澤総務企画課長、平野管理課長、村田高校教育課長、坂田高校改革推進室参事　ほか

４　概　　要

○教育長あいさつ

○委員紹介

○座長選出

○事務局からの資料説明

○意見交換

■教育長あいさつ

人口減少やデジタル社会の進展等に伴い、児童生徒を取り巻く教育環境の変化も加速化しており、先行きが見通しにくい予測困難な時代を迎えている。そうした中、国においては、今年１月に中央教育審議会から「令和の日本型教育の構築を目指して」と題する答申がまとめられ、従来の日本型教育の良さを生かしつつ、ツールとしての ICT を基盤として、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に育むという方向性が示された。このように、新しい時代の教育が大きく展開されようとする中にあって、京都府教育委員会においても、今後 10 年間の京都府の教育の目指すべき方向性を示した第２期京都府教育振興プランを今年３月に策定したところであり、その中に府立高校ビジョンの策定も示しているところである。

高校教育に関して、京都府では長年にわたり、小学区制や総合選抜制度を継続してきた独自の歴史があり、その転換を図ることが高校改革の主要課題となっていた。その後制度改善を経て、この間府立高校では、中学生から選ばれる高校づくり、希望する高校を選べるシステムづくりという方向性を基本として、主体的な選択ができる入学者選抜の改善を図るとともに、生徒のニーズに応じた多様で柔軟な教育システムの構築や、創意工夫を凝らした教育活動の展開等に努めてきたところである。

その一方で、府内の公立中３生数は、昭和 62 年をピークに急激な減少に転じ、今では半数以下となっていることに加え、もともと私学の割合が高い土地柄であるが、近年は府独自の私立高校への授業料無償化施策等の影響もあって私学志向が一層高まり、府南部地域を中心に公立高校の定員割れが続いているといった状況にある。また、高校等進学率が 99%に達する中、多様な入学動機や進路希望、学習経験など様々な背景を持つ生徒や、支援を要する生徒など、生徒の多様化が進

んでおり、中教審答申にも示されているように、特色化の一層の推進等を図っていく必要がある。
加えて、ICT の飛躍的発展やグローバル化、地方創生などこれからの社会で活躍する人材育成等、高校における教育内容や、求められる役割が大きく変化していることも考慮していく必要がある。
このため、本検討会議においては、「今後の京都府の高校教育はどうあるべきか」に始まり、府立高校が果たすべき役割や、劇的に変化する社会の中で生徒がこれからの時代を切りひらいていくことができる力を育む学校づくり、府立高校の在り方など、広範なテーマに関して、検討や協議をお願いし、それをもとにして、ビジョンとしてまとめていきたいと考えている。委員の皆様には、それぞれのお立場からご意見を賜りたいと思っている。本日の会議が実り多いものとなるようお願い申し上げる。

■座長選出

検討会議設置要綱の第４条に基づき、浅野委員を座長に選出した。

■意見交換

○京都府北部の状況で見ると、福知山市では公立高校が３つ、私立高校が３つある。高校を取り巻く環境を考えるにあたっては、公立高校だけでなく、私立高校との関係性を意識する必要がある。京都市内を見ると、京都市立高校があり、教育の選択肢があるということでは有益だが、ややもすれば生徒の取り合いが起こっている可能性もある。私立高校への進学率が非常に伸びているということの理由と、私立高校との差別化というものを意識しながら、議論を進めていく必要があると思う。「資料 10」として京都府の白地図に府立高校をプロットした資料をいただいているが、京都市立高校、京都府全域の私立高校を加えたデータをいただきたい。また、脱普通科化していくという話で言うと、それぞれの私立高校や市立高校がどのような学科をお持ちなのか、トータルで一覧できる資料があった方が議論を進めやすいと思う。

○私立高校のあんしん修学支援制度の話があった。もちろんのことながら、教育の機会をしっかり底上げをしていくために、都道府県の役割として行政が私立高校を支援していくのも大切なことだと思っている。一方で、この割合が伸びてきているという話で考えると、府立高校と私立高校の財政的バランスをどう考えていくのかということも論点になってくるかと思う。京都府の教育行政における、府立高校と市立高校や私立高校への支援の財政的な比率はどうなっているのかという部分は、ぜひとも論点として教えていただきたい。仮説としては、私立高校へのあんしん修学支援事業の支出が伸びてきているのではないか。府全体の予算の枠は決まっているので、私立高校への支援が増えれば、府立高校に使える部分が減ってくるのではないかということも考えられる。

○奈良県では県立大学の附属高校を創る動きがあり、こういった動きは全国的にある。例えば兵庫県立大学には附属高校があるし、高崎市にある高崎経済大学も附属高校がある。今日は中高一貫の話もあったが、中高連携と同様に、高大連携についての議論はどうか。京都府には公立大学だけで４つある。その公立大学との接続や連携も含めて、公立大学の附属中高について、これまで府教委として検討したことがあるのか、また、どのような考えを持っているのかを、今後の検討に向けて聞いてみたい。

○中学校現場での進路指導というのは、義務教育の出口として、総合的なすべてのものを含んでいるように思う。中学校現場では、通学圏内の高校生の状況は分かるが、府全体の状況まではつかみにくい。府立高校の全日制課程全体で定員割れが 739 人も生じているということ、それから高校生全体の生徒数において私立高校生が 46.5%、ほぼ半分を占めているということに驚いた。色々な私学援助制度もあって、以前と比べて、今は公立高校と私立高校との経済的なハードルがあまり変わらないと思う。そうなると、私立・公立の選択においては、その高校の魅力を中３生がどのように感じるかという視点が、大きな課題としてクローズアップされてくるかと思う。

○中３生の数が減るのは避けることのできない現象だが、中３生の数が減るということが、高校に対するニーズの種類が減るということではないと思う。今の子どもたちは情報化社会の中で多様な情報を得ている。そして、多様な子どもたち個々のニーズもあり、そこにどうやって公立高校が応えていかなければいけないのか、どういう方策があるのか、そのあたりが大きな検討課題ではないか。

○マーケティングの考え方に近いが、市場コンシューマー（消費者）を高校生と考えて、コンペティター（競合相手）は私立高校、カンパニー（自社）は府立高校というとらえ方の枠組みで、どう考えていくかとした場合、高校生という消費者はシュリンク（縮小）している。市場がシュリンクしている中で、高校をどのように存立させていくのかというとらえ方において、仮に会社として考えると、プロダクトライフサイクル（サービスを市場に投入してから需要が消失するまでのプロセス）の考え方なら、衰退産業なので本当は撤退戦略ということになるが、パブリックセクター（公的機関）ということでもあるので、そういうわけにもいかない。では、消費者が縮小していく中で、どうやってシェアを広げていくのかということを考えていくのが、今回の府立高校の在り方ビジョン検討会議の使命なのかなと感じた。

○主な論点の３点で少し気になったこととして、会社の「箱」というような側面で、その中に入る人材の視点が目に飛び込んでこなかったということがある。会社で言うと、会社としての組織の車輪と、そこで働く人材をどうやって育成していくのかという２つの車輪があって初めて会社が回っていくのだが、主な論点では器の方ばかりに目が向けられて、その中の高校生をどう育んでいくのかという視点が、少し弱いのではないかと思う。
府教育振興プランでは世界的な視野を見据えていたと思うのだが、身近な地域を意識しすぎることによって、高校生の世界に出て行こうという意識を下げてしまうのではないかと感じた。

○義務教育の最後、中３生を卒業させるときに、どういう進路をその子に保障するかということは、中学校としては一番重要としているところである。高校等進学率は 99%という状況だが、中学校では将来の生き方や職業も見据えさせて進路指導をしている。様々な困難を抱えている子どもたちにも、自分がどうしたいか、高校を卒業してどうするのかという指導を続けながら、何とか前向きに方向づけていくということが、中学校では非常に大事である。そういう意味で言うと、高校を自分の将来に向けての一つのステップととらえさせ、とにかく自分が何をやりたいのかを考えさせることが、中学校での指導の大きなポイントになってくる。もちろん子どもたち

には、公立・私立の違いを伝えたり、色々な体験をすることを勧めたりするが、最終的に、公立・私立どっちだというような指導にはならない。本人がどういう生き方をしたいのか、どういう高校を選ぶのかということについては、やはり本人・保護者の考えを尊重しながら進路指導を進めているところである。
以前は公立と私立との違いについて、子どもたちに経済的な面からアドバイスをすることもできた。現在は私学にも経済的な支援制度があって、選択しやすくなっている。子どもたちや保護者が、環境の良い学校を選んだり、大学とのつながりがあるところを選んだりという傾向もある中で、中学校側として公立高校のみを勧めることは、少しずつ難しくなってきていると思う。

○コロナ禍における中学生への学習支援として、その中学校の卒業生である大学生が来てくれているというケースがある。通っている大学が地域にあるというのではなく、地域に住んでいるから地元の中学校に支援に来てくれているという形で、出身中学校や地域のためにという思いのある若者が学校を助けてくれている。そういう地域とのつながりが、公立高校としての一つの大きなポイントになるのではないかと感じる。
地域の人材を地域で育てるために、府立高校と中学校がタイアップできるようなことがあればと思う。自分から積極的に行動できる中学生もいるが、消極的な子は塾などでの助言にもとづいて高校選択をし、学校体験や見学にも行かないということもある。高校生と中学生や大学生といった子どもたち同士の交流や連携ができれば、地域の高校の距離感が近くなるということもあるかもしれない。

○各委員の色々な意見を聞いて、府立高校に子どもを通わせる保護者として、大変心強いと思った。志願で人気のある高校と定員割れしている高校の差はあると思う。特色があるとか、特定のスポーツをやりたいから、こういう大学に行きたいからその高校を選ぶとか、目的意識をしっかり持って高校選択をする子もいるが、ただなんとなく地元の家の近くの高校に通いたいという子も大勢いると思う。そういう普通に地元の高校に通いたいという子どもたちが、その高校に行って楽しく高校時代を送れるような高校づくりも、大事だと思う。

○府立高校生の保護者の話を聞いて、先生方はとても親切で素晴らしいなと思った話をさせていただく。基本的な学力はあるが注意力に課題があるお子さんが、大学を受験され、合格された際に、高校の担任の先生がその大学と連絡をとって、大学入学前に保護者と生徒が大学の先生と面談できるように手配をしてくださった。高校の先生が「本当は自分も同席したかったが、予定が入っているので、また別のときに行かせてもらう」と言われたので、保護者は恐縮されたが、先生からは「保護者目線も大事だが、学校で子どもを見ている立場の私に分かることもあると思うので、行かせていただく」と言われたと聞いた。困っている生徒一人一人に手厚く対応する先生方がいらっしゃって、本当に素敵だと感じた。そういう府立高校の温かさを、しっかり発信していきたいと思う。

○京都は観光名所だが、コロナ禍で観光客が来られなくなっている。亀岡市では、その観光の分野と教育現場とがコラボして、保津川下りを中学生に体験してもらうとか、海にゴミを出さないために川の掃除をするなどと、教育の質を高める、自分の町をよく知るという点で、子ども

たちへの教育につなげている。これまで、観光客のための保津川下りや嵐山であったところが、地元の私たちが行き来しやすい場所になっており、コロナ禍の逆転の発想で、貴重な期間だと感じている。少子化の中で、子どもたちを包み込んでいく本当に手厚い教育が、今こそできる時だとも感じている。

○子どもが減っても学校は減らない。これは小学校や中学校も同じ悩みで、廃校にするのは、地域の方が心を痛めて「やめてくれ」と言われる。特色ある学校、魅力ある学校とはどんな学校かというところで、公立学校は本当に悩まれていると思う。教育行政がバックボーンにある学校というのは、受け皿がしっかりしている分安心だと、コロナ禍の中で特に思った。中学校に子どもを通わせる親としては、私立高校でも支援施策が進んでいるとはいえ、授業料・学費以外でも費用負担があると聞く。公立学校では、市・府や国などの行政がしっかり受け皿となって、子どもたちを育てようとする思いがひしひしと伝わってくる。そういった形においても、魅力ある学校づくりという部分を発揮していただきたい。

○定員割れしている学校は、希望している子どもは全員入学を許可するのかといった視点で、本当に歯がゆい部分もあるかと思う。また、学力だけではなく多面的な尺度で判定をするなど、選抜のスタイルも変わりつつあるとうかがっている。そういう面からも、定員割れしている高校の充足について考えていきたいと思う。定員割れしている高校の現状についてうかがいたい。

○大阪府では、再編統合などを相当の数行っているが、京都府は学校数を減らさないために、いろいろな工夫を重ねてこられたのだと思う。
地域で分けている通学圏によって、相当環境の違いがあるのだろうと感じている。私立の学校は京都市内に多いのではないか。その位置関係や学科の資料や、府立高校の学校ごとの志願倍率がわかる資料があればいただきたい。
ホームページで府立高校の学校経営計画などが公表されているが、特色づくりをこれからも進めていかれるにあたって、例えば学科設置等、府教委が進めておられる特色づくりと、コース等、校長先生のもと学校独自で進めておられる特色づくりとがどういう感じになっているのか、事例になるかもしれないが示していただきたい。各学校の不登校や中退などの状況も、可能な範囲で併せて情報提供してほしい。

○私立高校の割合が高いということはわかるが、平成23年にあんしん修学支援制度が拡充された以降も増え続けているのがなぜかというところに関心を持った。教育委員会の方でどのように分析をされているのか、次回おうかがいできればと思う。
私立の高校は大学進学に有利というふうに思っている人が多いのかもしれないが、もしかすると、障害がある、外国にルーツがあるといった、生徒の様々なニーズにこたえるような個別の対応であるとか、多様な教育内容が魅力であるなど、私立を選ぶ様々な理由があるのかもしれない。例えば、中学生や高校の新入生に行ったアンケートの結果などがあれば、論点1「高校の社会的役割」について考える上で参考になると思う。

○日本の新制高校ができたとき、日本の高校教育は高等の普通教育と専門教育とを併せ持つ、市民としての人材を育てる完成教育という形で出発したが、例えばフランスでは、完全に大学進学準備課程として高校が成立している。中学生の多くが大学進学に有利だと考えて私立高校を選択しているとすると、大学進学準備課程として公立高校を定義してしまえば勝てるわけがなく、それなら経営力のある私立高校の方がいいでしょうというふうに陥ってしまう。就職するにせよ進学するにせよ、どんな道に進むとしても、市民として１人１人の役割を発揮できるような完成教育の在り方としての高校教育を模索するのが、おそらく現実的な路線だと思う。机上の空論にならないために、中学生や新入生がどう考えているのかというデータが必要ではないかと思う。

○京都府においては、南北に長いという地域事情もあり、京都市内の府立高校、京都市内に近く通いやすい山城地域の府立高校、また同じく京都市に通いやすい口丹地域の府立高校、そして京都市には普通は通えない中丹地域や丹後地域の学校と、いろいろな違いがある。府立高校としては、地域によって求められるものも違ってくるというふうに思っている。そういった観点も踏まえて、この検討会議で、令和時代に対応した学校教育、魅力ある学校づくりについて考えていけたらと思っている。

○「京都」といっても、地域の実情の違いがあり、一言で語れないと感じる。マーケットが地域によって全然違うため、当然高校の在り方も違ってくると思う。定員割れの原因を、何かそこに求めすぎていないかという気がする。例えば、都市型というか、学校が非常に密集している地域では、私学に負けている、中山間地域は、人口減で苦しい、通信制・定時制は、広域通信制に負けている。私立の広域通信制は授業料が高いと思うが、授業料が安くて負けているところ、高いのに勝っているところというのがある。あと山城地域では、その位置から学校選択が京都市内に向かっているとともに、大阪にも向かっているのではないかという気が少しする。何が言いたいかというと、府立高校自体のブランド力が、非常に弱まってきていることの表れではないかということ。これまでは、私学に比べると授業料が安いというアドバンテージがあって、なんとか五分五分の戦いをしていた。ここでそういったアドバンテージを一気に失って、弱点が露呈したという気がする。マーケティングで見たときに、まず考えないといけないのは、前提条件として競合の状況がどうなっているかということ。それと、顧客のニーズがどこにあるのか。顧客のニーズの裏返しが、高等学校が持っている技術であり、すなわち教員の質であると考える。ここをどうするかという指摘をいただいていると思う。

○特色づくりについては、教育委員会が「こういう学科を置いて、こういう特色でいけ」と学校に言うのではなく、醸し出す特色というか、その学校が自分で考えて、地域のニーズに密着したにじみ出るような特色というものが出てこないと、本物ではないという気がする。
今回、府立の高等学校を選んでいただくために、魅力ある、あるいは貢献できる学校にするために、皆さんから色々な観点で意見をいただいて出していきたい。だから、特色づくりというよりも、府立ならではのブランドづくりを、この会議で検討していきたい。
公立高等学校の場合は、営利企業ではないので、大勢の人が来る必要はない。定員を超えればいい。定員を少し上回ればいいわけだから、そんなにむちゃくちゃなことではないと思う。